

これならできる! 新聞活用

NIE入門ガイド

これならできる! 新聞活用

NIE入門ガイド



これならできる！新聞活用——NIE入門ガイド

2019年3月初版

●発行
一般社団法人日本新聞協会 新聞教育文化部NIE担当
〒100-8543 東京都千代田区内幸町2-2-1
日本プレスセンタービル7階
電話：03-3591-4410 ファクス：03-3592-6577
ホームページ：<https://nie.jp>

©NIHON SHINBUN KYOKAI

◎写真協力
東京都北区立八幡小学校、東京都世田谷区立喜多見中学校、
東京都立赤羽商業高等学校 ※校名は発行時

目次

ページ

- ① はじめに
- ② **新聞のしくみを知ろう！**
- ④ **新聞に親しもう！**
まずはゲーム感覚で楽しく新聞と触れ合おう
- ⑥ **新聞をまるごと読もう！**
授業以外のすきま時間で主体的に新聞を読む子供を育てる
- ⑧ **新聞を授業で使おう！**
さまざまな教科・単元で活用し子供たちの力を伸ばす
- ⑫ **新聞を比べて読もう！**
記事の内容や扱いの違いからメディアリテラシーを学ぶ
- ⑭ **新聞記事を書こう！**
新聞記者に取材の仕方と記事の書き方を学ぶ
- ⑯ **新聞をつくろう！**
新聞づくりを通して情報発信力を高める



Newspaper in Education

* NIE (Newspaper in Education = 教育に新聞を)

●執筆者（敬称略）

田中孝宏（江戸川区立東小松川小学校校長／NIEアドバイザー）4～5頁、佐藤由美子（大分市立鶴崎小学校校長／同）9頁、矢澤和宏（焼津市立豊田中学校校長／同）10頁、伊吹侑希子（京都学園中学高等学校学校図書館司書教諭／同）11頁、二田貴広（奈良女子大学附属中等教育学校教諭／同）12～13頁、戸澤美佐（日本新聞協会NIE専門部会委員）14～15頁、堀口友紀（墨田区立小梅小学校主幹教諭）16～17頁、関口修司（日本新聞協会NIEコーディネーター）1、6～7、8頁

※校名・職名は発行時

子供が変わる。
教師が変わる。
授業が変わる。

もっと子供を伸ばしたい。その上、楽しく学ばせたい。できれば、楽に育てたいと、思うのです。

いろいろな教科・領域で、研究授業をしてきました。一生懸命に取り組めば、それなりに成果が表れて、教師の努力、そして子供の努力が報われる結果となりました。しかし、正直、疲れしました。教師も子供も。すると、残念ながら子供の成長のためであっても、同じ努力をしようと思わなくなるのでした。

そして、たどり着いたのがNIE。ちょっと面倒くさいけれど、まずは5分間、新聞の見出しだけでも読んでみようと思いました。そのうち5分が10分になり、面白い記事とも出会うことが増えました。すると、子供たちに語りたくなりました。そして、毎日のように子供が喜びそうな出来事を紹介しました。いつの間にか子供が真剣に聞くようになりました。子供に伝えたいことがたくさんあって時間が足りなくなりました。伝えられない分はもったいないので、スクラップをするようになりました。次第に授業で使えるような記事もスクラップするようになりました。子供たちにもスクラップを勧めてみました。家庭学習でスクラップしてくる子供も増えました。担任の話聞くだけの子供たちではなくなって、発言も増えました。結果として子供自ら考えるようになり、楽しく学ぶようになりました。

新聞で子供が変わります。教師も変わります。結果、授業も楽しくなって、楽にもなりました。そう、確信しています。

日本新聞協会NIEコーディネーター 関口 修司

新聞のしくみを 知ろう！

時間がない人こそ 新聞で情報収集！

新聞の大きな特長は一覧性です。紙面全体が見られるので、一通りページをめくって眺めるだけで、必要なことがざっと分かるようにつくられています。

そのための工夫が見出しです。見出しは十数文字で記事の内容を伝えるための、究極の「要約」と言えます。見出しを読むだけで、何があったか分かるようにできています。また、見出しは新聞社が重要だと思う順に大きくなります。時間がなければ、大きな見出しを読むだけでも構いません。最初は、興味のある面の見出しを中心に読んでみるのも手です。読み続けるうちに、興味関心は広がるものです。最初からすべてを読もうとしなくてもよいのです。

新聞記事の工夫

新聞記事の文章も時短のための工夫が詰まっています。まずは、リード（前文）。トップ記事など、大きなニュースには、本文の前に記事のポイントをまとめたリードが掲載されます。見出しとリードを読めば、記事の概要が分かるようになっています。また、ほとんどの記事は、大事な内容から先に書く「逆三角形」のスタイルでできています。時間がなければ、記事の終盤は読み飛ばしてしまっても構いません。

また、新聞記事には写真や図、表やグラフと組み合わせたものも多くあります。記事の内容をより分かりやすく伝えるための工夫です。連続型テキスト（文章）と非連続型テキスト（写真や図表などの資料）を関連づけて読む力をつける上で、新聞は格好の材料と言えるでしょう。



Diagram of a newspaper page layout with various sections and callouts:

- ページ**: 新聞の面ごとにページ数を書いてある
- 版**: 新聞は配達地域によって内容が変わり、版も切り替わる。印刷所に近い版ほど新しいニュースが入る
- 第3種郵便物**: 毎日発行する新聞は、第3種郵便物として認可されており、通常より郵便料金が安い
- カット見出し**: 見出しを強調する時に使う。色々な種類の模様がある
- 発行日**: 新聞が発行された日付
- 号数**: 創刊(1号)から、その日の新聞までの通し番号
- コピーライト**: 著作権がその新聞社にあることを示す
- 題字(題号)**: 新聞の名前
- 主見出し**: 最大の見出し
- 袖(そで)見出し**: 主見出しの横にある見出し
- 題字下広告**: 題字の下にある広告
- 前文(リード)**: トップ記事など長い文章の場合、ポイントを短くまとめることが多い。多くは段組みになっている
- トップ記事**: その日に一番大きく伝えたいニュース。新聞社ではアタマ記事とも言う。記事はおおむね新聞社が重要だと思う順に右→左、上→下に並んでおり、左上が次に伝えたい準トップ記事(カタ記事)になる
- 1段**: 文章の長さの単位
- 突き出し広告**: 記事の横にある広告
- 記事下広告**: 記事の下にある広告
- インデックス**: 1面以外に載っているおすすめ記事の要約とページ番号。気になる記事があれば、そこから読んでよい
- コラム**: 世の中の出来事や話題を扱った文章。ニュース記事と違い、記者の意見や感想が含まれる



まずはゲーム感覚で 楽しく新聞と触れ合おう

「新聞なんて読んだことない」。一昔前であれば信じられないことですが、今の子どもたちには結構います。そこで、まずはゲームのように新聞を使って楽しみましょう。ここでは小学校での取り組みを紹介しますが、工夫すれば中学校や高校でも取り組むことができます。

初級

新聞の中から
一番を探して
みよう!!

まずは新聞をめくらせるしかけを

「この新聞の中で一番大きい文字を探しましょう」と言って、同じ新聞を子供たちに配ります。子供たちが見つけた文字を黒板に並べて大きさを比べます。一番大きな文字を見つけたくて、自ら新聞をめくっていく子供たち。そのうち、広告の字が大きいことに気づいたら、なにげなく「なんでだろう？」と聞くのもいいですね。新聞にはいろいろな面があって、それぞれ特徴があることがなんとなく分かってきます。

同じ方法で、「この新聞の中から一番大きい数字を探しましょう」と発問してみます。教室は市場の競りをやっているかのごとくになるでしょう。子供たちが沸き立つ教室は楽しいものです。その上、経済面や政治面など記事の内容はちょっと難しい面も開いてしまい、「〇兆円、〇億円」という大きな数まで自然に見つけてしまうこともあります。

ほかにも一番長い単語や一番長い見出しなども探すと、略語の正式名称や見出しの約束なども分かってきます。



中級

われらは
新聞探偵団!!



次に新聞から情報を探させる

これが「しんぶん」か。子供たちが分かってきたら、あらかじめ、新聞の中から選んでおいた人物の写真や名前を黒板に張ります。そして、芝居がかった口調で「実は、昨日ある人から依頼があった。この人を探してほしいということだ。新聞を読んで調べてみましょう」と、あたかも探偵事務所の所長になったかのように子供探偵に依頼するように発問します。

さあ、こんどは子供たちは新聞をめくるだけでなく、おおざっぱに読みながら、人を探さなければなりません。「見つけました」と言った子供に「どんな人？」と聞きます。読めない漢字があるものの子と答える子供をしっかりとほめることも忘れずに！

同じ方法で「実は、この場所で何か事件が起こったみたいだ。どんな事件か新聞を読んで調べましょう」と、続けて発問するのもいいです。すっかり探偵になりきった子供たちは、ロールプレイングゲームの主人公になったかのように積極的に新聞を読みあさります。「見つけました。その場所ではこんなことがあったみたいです」。ここまでくれば、もう新聞を読んでいるも同然。そう、しっかり記事の中から情報を読み取ることを楽しみながら。

また、慣れてきたら、所長を子供に任せてみるのも面白いです。あらかじめ、所長になった子供は新聞を読んでおかなければなりませんし、友達からの依頼となるとほかの子供たちもより燃えることと思います。

上級

気になった
ものを
伝えよう!!

最後は記事を読むことにチャレンジ

新聞に慣れてきたら、いよいよ記事を読むことに挑戦です。といっても、「さあ、選んだ記事を切り取ってスクラップしましょう」なんて、結構子供にはハードルが高いのです。そこで、「新聞の中で一番気になったものをみんなに教えてください」と、発問します。「なんでもいいんですか」との質問には、「新聞に書いてあればなんでもいいよ」と答えます。一人20秒という時間を決めての発表。時間が決められていると、なぜか必死に答えようとするのは不思議なものです。

「僕はこの記事を選びました。この記事は、昨日〇〇という場所で、〇〇という人が〇〇をしたという記事です」。そう、記事を伝えるには、よく言われる5W1H(いつ・どこで・だれが・なにを・なぜ・どのように)を押さえないと伝えられません。20秒に慣れてきたら、その記事を選んだ理由も付け加えて、40秒程度にしてみましょう。

こうして、いろいろな面を探しているうちに、新聞全体の内容が分かってきます。そのうち、自分の興味関心のあるところを見つけたらしめたものです。もうその子供は、新聞が読める子供になっているのです。



授業以外のすきま時間で主体的に新聞を読む子供を育てる

新聞はできれば、まるごと活用したいものです。社会は多面的・多角的に捉えなければなりません。新聞をまるごと読むことで子供たちは、世の中のさまざまな出来事がつながっていて、さまざまな見方ができることに気づいていきます。知識や理解が点から線、線から面に広がる、学びの楽しさを実感させましょう。

ワンポイントアドバイス

いわゆる朝学習の時間によく行われるNIEタイムですが、朝は既にさまざまな活動がされていると思います。新学習指導要領のもと、対応が必要なものもあるでしょう。朝が難しければ、どこに位置付けたらよいでしょうか。例えば「帰りの時間」や「午後の授業時間の前」が考えられます。もちろん「総合的な学習の時間」に位置付けることもできます。まずは、教務担当と相談しながらアイデアを出し合ってください。

もっと詳しく！

スクラップのほか、1分間スピーチやワークシート学習、新聞クイズなど、NIEタイムのさまざまな活動例を紹介しています。学校の実情に合わせて取り組んでみてください。

<https://nie.jp/nietime/>



「NIEタイム」で新聞スクラップ

新聞をまるごと読む活動の代表といえば、「NIEタイム」です。この学習活動は、朝読書のような授業以外のすきまの時間を活用するものです。週に1回程度、授業とは別の時間に行います。例えば、毎週水曜日の朝8時30分から15分間、取り組みます。主な活動は、新聞スクラップです。これは、子供が新聞から興味関心のある記事を選び、それを切り取り、台紙やノートに貼り付け、要約や感想・意見などを書くものです。

「中学生だって新聞は難しいのだから、小学生には無理」との心配はいりません。低学年の子供が興味関心をもつような写真や広告は必ず載っています。子供たちは、多くの写真からお気に入りのものを切り取り、簡単な感想を書きます。吹き出しの紙を用意して貼れば、より書きやすくなります。「すごい」「きれい」「大すき」からのスタートです。中学年なら写真と見出し、高学年以上なら記事全体を使って感想や意見などを書きます。週1回実施している学校では、3か月程度で書く量・内容ともに明らかに伸びています。子供自ら成長を実感するようになると、さらに読解力、要約力、学びに向かう意欲も向上します。

ここでの指導のポイントは、文章の細かな誤りを指摘せず、小さな良さを認めること。でき上がった作品は、すぐに返すのがポイントです。良い箇所に下線を引き、「good」と書けば十分です。これなら1人当たり10秒もかかりません。ただでさえ忙しい先生が、丁寧にコメントを書く必要はないのです。NIEタイムは、授業ではありません。ねらいも成績の評定もないのです。

読むことが議論を生む 考えを深める

新聞を読むようになって数か月すると、考える土台となる知識が徐々についてきます。十分な知識とまではいきませんが、世の中のさまざまな出来事とつなげて考えることもできるようになってきます。そうなれば自分の考えを仲間に伝えたいものになります。

まずは、子供が各自選んだ記事の感想を交流させてみてください。4人程度のグループで発表の順を決めて進めると効率よくできます。手順は、まず記事の見出し、次に要約を言い、続いて感想を発表し、最後にその発表についてグループ内で感想などを交換して終わります。時間は、1人当たり2分程度。決められた時間内で進めることがポイントです。発表が終わったら必ず拍手で次の発表者に引き継ぐと、グループごとの時間差もできません。

さらに、その活動をレベルアップしてみましょう。子供同士で選ぶ記事のテーマを決めて新聞を読みます。新聞は同じものでも複数の異なる新聞でも差し支えありません。テーマに沿って選んだ記事をもとに議論します。上記と同様にグループで発表順を決め、見出し、要約、感想・意見の順に発表します。1人1分程度。全員の発表が終わったところで自由に感想を述べ合います。その際、A3判大の紙やホワイトボードに皆でメモを書き込み、思考を可視化して議論すると、考えの共通点や相違点が明らかになります。議論が深まり、多面的・多角的な理解ができるようになります。

先生も子供も 「無理せず、こつこつ」

NIEタイムを経験した多くの子供が同じように口にする言葉があります。始めた頃は「難しい」「面倒くさい」「できない」。しかし、3か月後には多くの子供が「できるようになった」「読めるようになった」「書けるようになった」に変わってくるのです。そのことから言えることがあります。それは、NIEタイムを始めた際に、子供の背中を上手に押せる先生であってほしいこと。3か月後の子供の成長を信じて、子供の良さを見つけ励まし続けてください。成長を実感するようになったら、先生は見守るだけ。子供たちは主体的に取り組むようになります。主体的な学びは、そこから始まるのです。

そのときが来るまで、先生も子供も、「無理せず、こつこつ」続けてください。



新聞を手に入れよう

NIEタイムで問題になるのは、いかに新聞を確保するかです。

一つは、新聞を購読している家庭の子供が数日分を持ってくること。この方法であればお金はかかりません。もう一つは「教材用価格」で購入すること。1紙当たり数十円で購入できます。週1回のNIEタイムなら、年間およそ35回。年間1000~1800円程度です。1人当たり月150円程度なら、教材費として集めることも可能ではないでしょうか。

もっと詳しく！

教材用価格が設定されている新聞を一覧で紹介しています。購読条件（同一日付で10部以上、など）、申し込み方法、問い合わせ先も掲載。ぜひ活用ください。

<https://nie.jp/teacher/book/>





さまざまな教科・単元で活用し 子供たちの力を伸ばす

授業にリアリティーとタイムリーな切実感が加わるのが新聞活用の魅力です。教室での学習を世の中とつなげ、「自分ごと」として学習できる授業をつくりましょう。すべての教科・領域で楽しく取り組めるのも特長です。授業にスパイスを加え、子供の学びを生き生きとさせましょう。

教科書から 飛び出す授業を！

これからの授業のイメージは、こんな感じです。学習の最初は、授業の目標につながる世の中の出来事を話題にします。これから始まる学習が自分の生活と直結するような切実感や課題意識を引き出せればOK。次に、本来の教科等の目標で学習を進めます。そのとき子供には学習の背景に世の中の課題が見えているかもしれません。そうなれば追究する意欲が持続します。最後に、学習したことをあらためて世の中とつなげます。授業を社会とつなげたり、授業で学習したりする資料として、新聞はうってつけです。授業のまとめとして新聞づくりをするのも効果的です。

学んでいることが世の中の課題解決につながると気づいた子供たちは、受け身の学習のままではいられません。社会の一員として主体的に取り組むようになるでしょう。

これからの学習は学習内容が一つの教科・領域では収まらなく

なってきます。つまり、教科横断的な学習が求められるようになってきたのです。そうなる教科書の内容を補う資料が授業の質を左右します。そこで活躍が期待できるのが新聞です。新聞記事の内容は、まさに教科横断的。教科等をつなぐものなのです。

学習と社会をつなぎ、生きて働く力を育てるために、教科書から飛び出す授業を、新聞で演出してください。



新聞記事で 授業を楽しく

ワンポイント アドバイス

「忙しくて新聞に目を通す時間がない」。その気持ち、よく分かります。まずは、時間を決めて新聞をめくる習慣をつくることです。最初は立ったままバラバラと見出しと写真だけ。時間にして約2分！ポイントは「これを誰かに話したい！」。何かを探そうとするのではなく、知らなかったことを発見するつもりで。気になる記事はクリアファイルにはさんでとっておきましょう。まずはそこからスタートです。

教科書に新聞が出てきたら 「本物」を使うチャンス

新聞を授業で活用するねらいは「今を実感させる＝リアル」につきます。教科書で学んでいることが、自分の実生活と結びついていることを知ったとたんに、子供たちの目が輝き始めます。新聞は「社会の窓」です。まだまだ狭い人間関係の中で生活している子供たちに、「あなたの生きている世界は、こんなに広くて、たくさんの人とつながることができるよ」ということを味わわせるために、新聞をうまく授業に取り入れると良いと思います。

まずは、教科書で「新聞」が取り上げられている際に、本物の新聞を使ってみてください。国語科では4年生の「書くこと」で、新聞の特徴や作り方を知り、伝えたいことが明確になる文章を書く学習や、新聞写真等のアップとルーズの効果を考える読み物教材があります。5年生の「読むこと」では、複数の新聞記事を読み比べたり、見出しやリードから要旨をとらえたりする「編集のしかたや記事の書き方に注意して新聞を読む」単元があります。このようなときに、教科書で学んだ知識を本物の新聞で確かめてみるのです。地元のお祭りやスポーツイベント等の記事は興味も引きやすく、使いやすいと思います。社会科でも、教科書の内容と関連ある地元の記事を持ち込むと「社会の一員である自覚」が育ち、主体的な姿が見られるようになります。

新聞でワクワク感を高める 喜びそうな記事からスタート

このほか、動物園等に社会見学に行く前に、その施設に関する新聞記事や広告を掲示したり、授業で触れたりしておくと、子供たちのワクワク感を高められます。体験した後に、感じたことを新聞形式で表現させることも効果的です。低学年から継続すると「書く力」がぐんぐん伸びていきますよ。

いずれにしても、最初から「この記事で1時間の授業を組み立てよう！」と考えるのではなく、「ここで、この記事を見せると子供が喜ぶかな。びっくりするかな」という感じで取り入れていくことからスタートしてみましょ。子供たちに「今」を実感させるため、日々の学校生活や授業にちょっとだけ「新聞」を持ち込んでみてはどうでしょうか。



新聞で社会とのつながりを実感

各教科で活用可能な記事例

数学科	生活の中にある数字やグラフなど
理科	生物や化学、宇宙、気象、最新の科学など
音楽科	曲や作曲家、音楽生活など
美術科	作品、作者、展覧会情報など
保健体育科	練習方法や健康・安全、身体特性など
技術・家庭科	先端技術やコンピューター、栄養、調理など
外国語科	国際社会の様子や外国の文化、英文記事など

ワンポイントアドバイス

スクラップ以外に、記事集めに役立つのが公立図書館のデータベースや新聞社のサイトです。データベースやインターネットで記事を検索してみましょう。新聞社のサイトでは、ワークシートも充実していますよ。

もっと詳しく!

記事やコラム、社説などをもとにワークシート教材を作成している新聞社を紹介しています。手軽に入手でき、すぐに授業で使えるワークシート。ぜひ活用してください。
<https://nie.jp/worksheet/>



工夫次第でどの教科でも新聞は「情報の宝箱」

新聞は「情報の宝箱」。あらゆる分野にわたる、最新・最先端の吟味された情報が図表や写真付きの分かりやすい形で網羅されています。そのため、すべての教育活動で活用できます。タイムリーでリアリティーあふれる情報は社会と自分とのつながりを実感できる窓口として、「主体的・対話的で深い学び」の効果的な学習材となります。

新聞には、国語科で利用できる多様な文章が載っています。最新の図書情報もあります。また、社会科では、国際情勢や身近な生活、歴史解説の記事などにより、授業で学習した内容が実際の社会にあることに気づき、関心が高まります。国語科や社会科だけではなく、左表の通り、実はどの教科でも使えます。新聞の活用は工夫次第で無限です。楽しく自由に。まずは使ってみましょう。

議論するための材料に一つではない答えを考える

教科の授業のほか、道徳や総合、特別活動でも有効です。新聞はさまざまな立場、視点、考え方を反映した日常の出来事を紹介しています。そのため、多面的・多角的に「考え、議論する道徳」の資料としても適しています。

例を挙げてみます。実業団女子駅伝で、骨折した選手が負傷後も四つんばいになって前進を続け、何とかたすきをつないだという記事。記事は、たすきをつないだ選手に称賛の声が上がる一方、大会運営者がレースをやめさせるべきだったとの批判があるという「賛否両論」を紹介しています。この負傷した選手にレースを続けさせるべきか、さまざまな立場から議論してみましょう。

また、航空機に搭乗しようとした車いすの男性が、航空会社の人から「歩けないと乗れない」と言われ、腕の力だけではってタラップを登ったという記事。この記事を読んで、男性や航空会社職員、周囲の人など役割を決めてロールプレーを行い、それぞれの立場で考え、議論するのはどうでしょうか。

このように、現実には起きている、答えが一つではない課題に対して、自分の問題として向き合い、より実践的に考え、議論し、生き方を深めていく上で新聞は大いに役立ちます。

新聞で社会に出るための準備を



信頼できる情報を探す最新の出来事を知る

生徒たちの周りは、たくさんの情報であふれかえっています。今の高校生はデジタルネイティブとも言われ、ニュースを知りたいときや何か調べたいことがあれば、まずはインターネットで検索します。しかし、その情報が本当に正しいことを伝えているのか、真偽を判断する根拠は曖昧で、十分に判断できているとは言えません。書籍や新聞など、信頼できる情報源に接した上で判断する姿勢を養うことが大切です。学校図書館と連携して、単元に関連する記事や本をそろえたり、授業時間外で生徒が主体的に調べたりするといった活用方法もあります。

特に新聞は、日々の最新の出来事が掲載されるので、どの教科においても、教科書では追いつかない情報をアップデートすることができます。単元に関わる記事を提示するだけで、生徒はいま学習していることが実社会ともつながっていると、リアルな感覚が持て、学びの幅が広がります。

主体的に探究するきっかけに広い視野で問題を考える

例えば、マイクロプラスチックによる海洋汚染問題で、大手外食企業がプラスチック製ストローを紙製に換えるというニュースが報じられました。これを素材に、生物の「生態系」の単元で、海洋汚染による生態系への影響について、図書館を活用して調べ、解決策を考える授業展開が考えられます。家庭科の「消費生活と環境」、保健体育科の「健康と環境」といった単元では、身の回りにあるプラスチック製品を他の素材に置き換えられないか、具体例を挙げながら検討する探究活動をすることも可能です。こうした取り組みを通して生徒は、具体的な環境保全に向けてどのように行動すればよいのか、「自分ごと」として考えるようになります。

また、高校生は、18歳で選挙権を得るだけでなく、成人することになります。新聞は、国政や居住する地域の課題を見つけるきっかけにもなります。私たちが生きる社会はどのようにすれば、より良くなるのか、未来を考えるためには、まず現状を知ることが大切です。広い視野を持つには、身近な地域だけでなく、日本や世界の出来事をいち早く報じる新聞を読むことで、今まで気づかなかった問題点が見えてくるはずです。

ワンポイントアドバイス

学校図書館と連携し、学校司書や司書教諭とともに記事をスクラップしておくこと、授業のときにすぐに用いることができます。事前に単元や地域情報などテーマを決めて、計画的に行いましょう。図書委員など生徒と一緒に記事集めをする活動もおすすめです。

もっと詳しく!

新聞を活用した実践例を詳しく知りたい方は、「新聞を活用した教育実践データベース」がおすすめ。全国の先生から寄せられた1000件以上の実践が掲載されています。
<https://nie.jp/report/>





記事の内容や扱いの違いから メディアリテラシーを学ぶ

どれも同じように見える新聞ですが、同じ新聞は一つもありません。読み比べてみれば、記事の内容はもちろん、位置や大きさ、見出しや写真など、さまざまな違いに気づくはず。その違いに着目して読み比べることで、情報の送り手が何を伝えたいのかが分かってきます。読み比べて情報を読み解く力をつけましょう。



新聞の1面読み比べで 5種類以上の学びが可能に！

新聞の「1面トップ記事」は、その新聞社がその日の紙面で、一番大事だと判断した記事です。そのため、同じ日の各紙の1面を見比べると、各新聞社がどんな出来事を大事だと考えているの一目瞭然に分かります。しかも、トップ記事（アタマ記事）、準トップ記事（カタ記事）、3番手の記事と、その新聞社が「今日はこれが1番でこれが2番、このニュースが3番目に大事…」とランク付けしたニュースが載せられています（3頁参照）。

子供たちに、「A新聞社は〇〇のニュースが一番大事だとみなしているけど、B新聞社は同じニュースを2番手にしていて、トップ記事は別のニュースだね。どうしてだろう？」といった問いを投げかけ、考えさせることができます。

同じ日の朝刊1面を読み比べるだけで、以下の事例のように、さまざまな学びが可能になります。

ワンポイント アドバイス

新聞の読み比べをする際には、A新聞とB新聞の1面トップ記事が「同じなのはなぜ？」と問うよりも、「違うのはなぜ？」と問う方が、子供たちは考えやすいようです。「違い」に着目させてみましょう。

学び1 トップ記事が同じニュースの場合①

見出しの違いから新聞社が伝えたいことの違いを考えさせる

例：女子テニス・大坂なおみ選手の四大大会優勝の記事見出しで

A新聞「世界1位アジア初」

B新聞「全米に続き四大大会2連勝」

C新聞「世界ランク1位」

→こんな問いかけをしてみよう

「B新聞だけ世界1位がないけど何を伝えたいのかな？」

「A新聞だけアジア初とあるのは何を伝えるためでしょう？」

学び2 トップ記事が同じニュースの場合②

写真の違いから新聞社が伝えたいことの違いを考えさせる

例：アイドルグループの解散の記事の写真で

A新聞「グループ全員の笑顔」

B新聞「リーダーの泣き顔のアップ」

→こんな問いかけをしてみよう

「国語で習った『アップ』と『ルーズ』を写真の分析に使えうだね。B新聞はどうしてアップの写真を使ったんだろう？」

学び3 トップ記事が同じニュースの場合③

記事本文の違いから新聞社が伝えたいことの違いを考えさせる

授業展開例：基本的には、下記のような流れで授業を進めます

①A新聞とB新聞の1面のトップ記事を比べて、A新聞にはあるけれどB新聞にはないことを見つけ出そう

②どうしてA新聞には載っていて、B新聞には載っていないのか考えてみよう

上記②の活動のときに、子供たちでは答えがなかなか見つけ出せなかったり、不十分になったりすることも多いです。そんなときは新聞社のNIE担当窓口や、各新聞社の支局に問い合わせてみると解決します。新聞社や新聞記者の協力を得やすいのもNIEの魅力の一つです。

学び4 トップ記事が異なるニュースの場合①

A新聞とB新聞でトップ記事が異なる理由を考えさせる

全国紙同士を比べてもよいですが、以下のような違いがある地方紙と全国紙を比べる方が取り組みやすいでしょう。地方紙がない地域の場合は、地方紙を取り寄せてもいいですね。北海道と沖縄の地方紙では、トップ記事が全く違ったりしますよ。

▶地方紙→その地域の市民にとって重要だと新聞社が判断した話題

▶全国紙→全国的に見て重要だと新聞社が判断した話題

学び5 トップ記事が異なるニュースの場合②

A新聞とB新聞でトップ記事や2番手、3番手の記事を読み比べさせて、各新聞社の価値判断の違いの理由を考えさせる

例：A新聞のトップ記事がB新聞では2番手の記事だった場合

→こんな問いかけをしてみよう

「B新聞がA新聞のトップを2番手にした理由を考えてみよう」

「自分たちで分からない場合は、新聞記者にたずねてみよう」



学校図書館を 活用してみよう

みなさんの学校図書館には、複数の新聞が置かれていますか？実は、政府は複数の新聞を配備できるよう、各自治体に地方交付税を配分しています。図書館に複数紙があったら、「読み比べ」のチャンス！先生が図書館で新聞をチェックして「これは授業に使える！」と、発見してみてもいいですね。子供たちに役割を割り当ててチェックさせ、帰りの会などで「今日の1面読み比べ」を発表させてもいいですね。

もっと詳しく！

公立小中高校の学校図書館に新聞を配備するための地方財政措置の現状、新聞のある図書館が育む子供の力などを紹介しています。学校図書館の充実について一緒に考えてみましょう。
<https://nie.jp/library/>





新聞記者に取材の仕方と記事の書き方を学ぶ

新聞記事を書く作業には、取材のベースとなる情報収集、記事のテーマについて考えをまとめる、読者の理解を深めるための補足データ探しなど、アクティブラーニングにつながる要素が多く含まれています。記者がどのように取材し、記事を書いているかを知り、指導に生かすことで、新聞づくりをより深い学びにしましょう。

新聞をつくる過程には、さまざまな作業があります。テーマ決定→事前調査・質問作成→取材→記事執筆→編集会議→レイアウト・見出し制作→校閲→印刷。ここでは、取材の準備から取材、記事執筆までのポイントを解説します。

I 取材の準備

新聞のテーマが決まったら、取材対象について調べます。これは取材の大原則。簡単に取り組める調査方法は、①インターネット②新聞データベース③学校図書館などにある書籍や雑誌④身近にいる詳しい人に聞く——など。調べる際は、現状だけでなく経緯や背景など、過去についても調べるといいでしょう。賛成・反対など意見が対立する事案を取材するときは、必ず両方の意見について調べ、バランスを取るようにします。事実関係は、複数の

情報に照らして確認することが不可欠です。調べ始めると知識が蓄えられ、取材したいことがあふれてきます。学ぶことの楽しさを感じられる場面です。

取材相手への質問は、頭に浮かんだ疑問をどんどん書き出して作ると良いでしょう。下調べなくしてこの作業はできません。取材できる時間は限られています。記事をどのように書くか、構成を考えながら書き出した質問を取捨選択しておきます。



II さあ取材

取材するときは、相手の目を見て話しましょう。話を聞きながら、「はい」「そうなんです」など、相づちを打つと会話がスムーズに進みます。分からないことは、分かるまで聞いてください。メモをしっかり取ることも忘れずに。事前に用意した質問通りにいなくても大丈夫です。それが普通ですし、臨機応変に対応できる力をつけることにつながります。5W1H（いつ・どこで・だれが・なにを・なぜ・どのように）を思い出し、聞き漏れがないか確認するのも大切です。

取材中は五感（見る・聞く・触れる・味わう・嗅ぐ）をフル稼働させます。相手が繰り返し語ることは何か、相手の口調はどうかなど、よく観察します。何度も登場する言葉は伝えたい思いであることが多いです。また「目を細め、にっこり笑った」「唾液が飛ぶほど力強い口調だった」など、その場にいるから分かる様子を入れると、記事に臨場感が増します。読者の脳裏に、現場の様子を再現させることができれば大成功です。

III 記事を書く

だれが読んでも分かることが第一です。5W1Hを駆使して、シンプルで読みやすい文章を目指しましょう。接続詞を使っただらだと長文にするのはNG。文中に場所や組織・団体の名前、出来事などを入れるときは、簡単な説明を入れましょう。例えば、明治の文豪である夏目漱石▽野生のコアラが生息するオーストラリアなど。記事を読み進めるうえで、理解を深める助けになります。

記事の源は取材メモ。記事に必要な要素を付箋やメモ用紙に書き出して、文章を組み立てていきましょう。取材したことを全部は書けません。的をしぼり、伝えたいことを中心に説明で肉付けしていくイメージです。どうしても残したいネタは、編集後記に書くのも手です。

記者が「なるほど、そうだったのか」と驚いたり、発見したりしたことは、読者と共有したいものです。取材で得た大切な要素として記事に入れましょう。記事が完成したら自分以外の人に読んでもらって、意見を聞きましょう。思わぬ間違いに気づいたり、分かりやすい文章を書くヒントが得られたりします。

ワンポイントアドバイス

▽取材前の調査を怠るのは取材相手に失礼。取材のために相手が時間を割いてくれたことを忘れて▽取材のとき、質問に行き詰まったら5W1Hを活用しましょう。突破口になるかもしれません▽写真は何を伝えたいかによって撮り方が変わってきます。立った位置だけでなく、左右に寄ったり、目線に高低を付けたりするだけでもガラッと雰囲気が変わりますよ。

新聞社の出前授業を活用してみよう

新聞各社は、記者を派遣する出前授業を実施しています。テーマは自由。新聞社は職種のデパートと言われ、多種多様な業務を個々の社員が担っています。政治・経済・国際問題から、修学旅行後に学習新聞を制作したいのでコツを教えるなど、さまざまな要望が寄せられています。学校と新聞社の都合が合えば、子供たちに非日常の学びの場が提供されます。刺激的で、モノの見方を広げるチャンス。まずは各社に問い合わせてみましょう。

もっと詳しく！

実際の出前授業の様子が知りたい方は、こちらから模擬授業動画をご覧ください。出前授業をしている新聞各社の担当者の声も掲載しています。
<https://nie.jp/demae/>





新聞づくりを通して 情報発信力を高める

なぜ、新聞づくりをするのでしょうか。各教科の学習活動に「新聞づくり」を取り入れることで、情報発信に必要な力を身につけ、情報活用能力の実践力を高めることができるからです。それが、学習指導要領が目指す、児童生徒の思考力・判断力・表現力を身につけさせることにつながります。



■ B4判新聞の例



■ かべ新聞の例

I レイアウト (記事の優先順位)

B4判の新聞であれば、おおよそ4~5本の記事が書けます。トップ記事は一番上の大きな枠に書き、次に2番手の記事というように、伝えたい内容、自分の思いに合わせて、記事を選んで書き込む場所を決めます。これがレイアウト(割り付け)です。

最初は、教師がレイアウトを書き込んで印刷した用紙で始めます。型があることで子供たちは安心して書き始めます。学校新聞用やファクス用の原稿用紙など、薄いマス目のある用紙に印刷すると、さらに書きやすくなります。外枠、題字と発行者枠、トップ記事、コラム枠を書くだけでも十分です。

また、誰に何を伝えるか、常に相手意識をもたせることが大切です。相手によって表現方法が変わってきます。常体や敬体などの語尾に注目させるのも学習の一つです。どんな記事をトップにするかなど、内容の軽重の判断力も自然と養われます。

II 分かりやすく伝える (表現力向上)

読み手を意識して、相手に分かりやすく伝える工夫を取り入れることが大切です。そこで、記事に写真やイラストを入れます。文章だけではなく、写真やイラストで読者を引きつけるのです。取材した人のコメントをそのまま吹き出しで表現するのも効果的です。

記事に応じてグラフや表を入れてもよいでしょう。このような活動を入れることで、表現力がさらに磨かれます。さまざまな教科でのノートのまとめ方も上手になっていきます。

III 見出しづくり (思考力・要約力向上)

見出しは、本文の内容を一目で分かるように表現することが大切です。そのために、短い言葉(8~12字)にまとめていきます。そのとき、具体的な名称や数字を入れるように指導すると、読み手に分かりやすく伝わる見出しになります。自分の書いた記事のどの言葉を抜き出し、短くまとめるかを考えることで、思考力も磨かれていきます。

IV 交流する (コミュニケーション力)

学習新聞は、「一人でつくって掲示して終わり」になることが多いと感じます。時間をかけてまとめる新聞づくり。さらにステップアップして、意図的に交流の場をつくっていきます。

見学や取材などの体験で得た情報や下書き、見出しをグループで共有し、お互いの良さに気づかせ、意見を述べ合う場と時間を設定します。グループでより良い表現の工夫を考え、伝え合うことが大切です。そのとき、大きめの付箋に、友達のために考えた見出しを書いて貼って交換することも有効です。

V 編集後記 (自分の考えを持つ)

調べたことや体験したことを伝える新聞づくり。この編集後記では、すべてを書き終わった後で制作した感想を書きます。

今までは、事実を正確に伝える記事を書いてきましたが、最後に自分の考えを書きます。新聞にまとめてみてどう感じたか、これから自分はどのようにしてこう考えたかなどを書きます。

さいごに

新聞づくりで児童生徒の書く力や考える力が磨かれます。子供たちは次第に、新聞にまとめることや見出しなどの短い文を考えることが楽しくなっていきます。そうした変容を見ると、自分のことのようにうれしくなります。ぜひ、新聞づくりにチャレンジしてみてください。



■ はがき新聞の例

ワンポイント アドバイス

① 100マス作文の活用

短作文用紙を使って、日常的に書く習慣を身につけます。その内容を五七五の十七音にまとめることも合わせて続けると、1段落を要約する小見出しづくりも得意になっていきます。

② 国語辞典の活用

どんな教科でも辞書を使って疑問に感じた言葉を調べる活動をします。調べた語句には付箋を貼り、視覚的にも自分の調べた言葉が増えていくことを実感させるとよいです。語彙を豊かにすることへの意欲向上に役立ちます。